山本健吉俳句読本

角川文化振興財団編

第三巻

現代の俳人たち

角川書店

本健吉俳句読本

代の俳人たち

角川書店

山本健吉俳句読本　第三巻

現代の俳人たち

平成五年九月十日　初版発行

著　者　山本健吉
発行者　大洞國光
発行所　株式会社角川書店
〒一〇二　東京都千代田区富士見二―一三―三
☎（〇三）三八一七―八五二一（営業）
（〇三）三八一七―八五七一（編集）
振替　東京三―一九五二〇八
印刷所　暁印刷株式会社
製本所　株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします。
© Printed in Japan ISBN4-04-850903-9 C0395

目次

I

■正岡子規　正岡子規……10
■高浜虚子　高浜虚子の世界――「存問」と「軽み」と……14
■飯田蛇笏　飯田蛇笏……18
■渡辺水巴　水巴さんを思う……24
■原　石鼎　石鼎の時代……32
■久保田万太郎　久保田万太郎……41
■富田木歩　鬼気の俳人・木歩……48
■尾崎放哉　放哉のこと……61
■種田山頭火　『山頭火句集』複刻に寄す……64
■寺田寅彦　寺田寅彦の「連句論」……66

II

■水原秋桜子
水原秋桜子――風景俳句の革新……72
秋桜子俳句の「きれい寂」……81
■山口誓子
山口誓子……89
誓子俳句私観……101
■日野草城
日野草城……107
■高野素十
素十俳句を推す……120
■阿波野青畝
『旅塵を払ふ』から……122
■富安風生
『定本富安風生句集』を読む……124
■山口青邨
青邨の句の色……131
■杉田久女
久女讃……136
■阿部みどり女
老年の花――阿部みどり女の俳境……143
■高浜年尾
年尾氏の句境……146
■芝不器男
芝不器男のこと……152

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

III

■中村草田男
中村草田男……156
草田男氏を哭す……166
■加藤楸邨
加藤楸邨……170
加藤楸邨の「道」……178
■石田波郷
石田波郷……183
惜命の句境——石田波郷の晩年……193

IV

■大野林火
林火氏の俳生涯……198
■西島麦南
麦南氏の人と句と……204
■西東三鬼
三鬼の「俳意」……209
■秋元不死男
不死男追悼……214
■三谷昭
三谷昭追悼——三谷昭と西東三鬼とを思って……224
■平畑静塔
静塔俳論讃……228

■高屋窓秋　高屋窓秋の俳句……233
■安西冬衛　安西冬衛と俳句……235
■中島月笠　月笠氏の句業……239
■橋閒石　橋閒石の「俳」世界……244
■石橋秀野　石橋秀野……251
■石川桂郎　『妻の温泉』跋……256
桂郎追悼……258
■角川源義　弔辞——角川源義告別式にて……262
角川源義氏を思う……265

V

■飯田龍太　山廬・山居・山家……270
■森澄雄　面と籠手と……275
■能村登四郎・林翔・福永耕二　登四郎・翔そして耕二——「沖」に寄す……278
■沢木欣一　沢木欣一の一句——畦豆と秋風……286

■赤尾兜子
兜子追悼……289
■細見綾子
「俳諧常住」のこころ——『存問』雑感……292
■野沢節子
神の滝に憑かれたひとびと——陸・海・空の視座より……296
■中村苑子
中村苑子の詩魂……302
■角川照子
『幻戯微笑』跋……305
■鷹羽狩行
寡黙と談笑……311
■上田五千石
「風の又三郎」の縁……315
■車谷弘
遊俳のひと車谷弘……323
■下村ひろし
下村ひろし——遺句集に寄せて……327
■大村富美子
『返り花』に寄せる……334
■渡辺恭子
花野……337
■角川春樹
『一つ目小僧』跋……341
解説　川崎展宏　349
解題　356

装丁　熊谷博人

現代の俳人たち

山本健吉俳句読本　第三巻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

I

正岡子規

日本海々戦の時の連合艦隊の参謀であった秋山真之と正岡子規とは、郷里松山の中学校でも、上京して共立学校から大学予備門にかけても、机を並べた学友であるが、その親しい交わりについては、司馬遼太郎氏が小説『坂の上の雲』に書いている。だが、共立学校では南方熊楠とも同級であったことは、司馬氏は書いていない。

その時のエピソードを、南方は後に、河東碧梧桐が『続三千里』の旅で紀州田辺に立寄ったおり、三十年前の昔話として語っている。――「当時正岡は煎餅党、僕はビール党だつた。煎餅を嚙つてはやれ詩を作るの句を捻るのと言つてゐた。自然煎餅党とビール党の二派に分れて、正岡と僕とが各々一方の大将顔をしてゐた。今の海軍大佐の秋山真之などは、始めは正岡党だつたが、後には僕党に降参して来たことなどもある。イヤ正岡は勉強家だつた。さうして僕等とは違つておとなしい美少年だつたよ。面白いというても何だが、今に記憶に存してをるのは、清水何とかいふ男の死んだ時だ、矢張君の国の男だ、正岡が葬式をしてやるといふので僕等も会葬したが、何処の寺だつたか、引導を渡して貰つてから、葬式の費用が足らぬといふので、坊主に葬式料をまけて呉れといつたことがあつた、

と腹のド底から出るやうな声でハッハッと笑ふ。」（河東碧梧桐『続一日一信』「日本及日本人」）

思い出話の中にも、「西郷隆盛の銅像然とした大入道」南方の面目が躍如としていて、いくらか話を割引して聞くとしても、明治を代表する三人の巨人が教室で競い合ったというのも面白い。それにこの時の教師には高橋是清がいて、パーレーの万国史を講じている。子規等が共立学校に在学したのは、明治十六年から十七年へかけての短い期間だが、その間にも南方と並んで一方の大将であったというのは、如何にも子規らしく、それが煎餅党とビール党であったというのも、明治の書生らしいユーモアが伴う。子規は金もなかったが、酒も飲めなかったのであって、秋山はこの頃から酒の味を知っていたのであろう。

三人は揃って大学予備門（後の一高）にはいるが、南方と秋山とはいずれも中退し、子規だけが東大に進み、これも卒業しなかった。だが、一高時代に夏目漱石との交遊が始まり、二人は妙にうまが合った。同じ歳だったが、漱石の回想によれば、何でも大将にならなければ承知しない子規に対して、漱石の方で調子を合せ、彼が自分の思う通りに自分を引き廻すのにあえてまかせたのである。自分は子規ほど熟さなかったし、万事が弟扱いだったと言っているが、これはむしろ性格の相違で、何でも大将になりたがる子規の方がかえって幼さを露呈しているとも言える。性急に道を切り開いて進もうとする者と、一歩遅れて従いながらゆったりと熟そうとする者との間の相互信頼が、そこにはあった。

だが、子規のそのような性格が、俳句・短歌・散文のすべてにわたっての革新事業を、彼に成就せしめたのである。彼の存在するところ、何処にでもグループが発生し、それは雪だるまのように大きくなって、一つの運動となる。彼が伊予藩の子弟を収容した本郷真砂町の常盤会寄宿舎にはいった時、

同室になった新海非風と始めは遊戯半分で俳句を作り出したのに、舎監の内藤鳴雪や、同じ寄宿舎生の五百木飄亭・竹村黄塔・勝田明庵等が引きこまれ、子規の従弟の藤野古白も仲間にはいり、噂を聞いて郷里松山の河東碧梧桐や高浜虚子等も、手紙で指導を受けるようになる。その時子規が、皆にぬきんでて卓抜な俳句を作っているというのではない。ただ彼が最も古俳諧を研究しており、加えて理論好きであったので、自然彼が中心となり、彼にみな信服するという形を取ったまでである。月並俳諧の境地を脱しなかった子規に較べて、月並俳諧を知らない非風や古白は始めから月並の拘束をまぬかれ、感覚的にも鋭く清新な詩境を示した。一時的には、子規のような努力型より、古白・非風のような直感型が句において成功したが、要するに一時のことで、後には月並を知らないことが月並への陥穽(かんせい)ともなるのである。

一握りの伊予びとのグループから、俳句革新の運動が始まった。書生たちの起した新しい文学運動だが、尾崎紅葉等の「我楽多文庫」の運動に形は似ていて、そこには、田舎者と江戸ッ子との意識の違いがあった。

子規は始め小説に野心があり、書き上げた『月の都』を持って谷中の幸田露伴を訪れたが、露伴に認められず、小説家志望を断念した。「僕は小説家となるを欲せず、詩人とならんことを欲す」(虚子宛書簡)と言い、また「人間よりは花鳥風月がすき也」(碧梧桐宛書簡)と言ったのは、だからいささか負け惜しみめく。だが彼の文学観には、どこかフィクション(小説)と折合いのつかない考え方、あるいは生来の傾向があって、彼をして短詩型文学を志向せしめたように思われる。同じ詩人仲間でも、新詩社系の歌人や新体詩人たち、また乙字や井泉水のような新傾向俳人たちには、子規の作品は

想像力あるいは創意を欠いていると言われていて、これはそれなりの根拠のある言葉に違いなく、そんならそれは藝術家としての致命的欠陥ではなかったかと思われてくるのだ。

だが、それにもかかわらず、子規の人と藝術とは、われわれ日本人の心の多くを捉えて離さない魅力がある。彼は写生を唱えたが、この主張は彼のフィクションと折合わぬ東洋人的性向と不可分ではない。彼の写生説は、窮極において人間の意志の訓練を説いたものと思われる。見ること、対象を尊重し、鍛錬することは、「志」の問題であり、彼の真意は詩序に言う「言志」ということにつながってくる。藝術作品だから、結局はそれは美なのだが、美と言っても、作品それ自体で完結する美なのではない。作者の意志が作品に到達するその姿勢の中に、言ってみれば美がある。だから病牀に釘づけになって、わずか六尺の世界に触れて発する無造作な即興の感懐が、短歌であれ俳句であれ写生文であれ随筆であれ日記であれ、一つの生命、一つの精神の美を湛えていて、私たちを讃歎させるのである。

（一九七二）

高浜虚子の世界——「存問」と「軽み」と

この十一月二十三日、四国の松山で虚子・碧梧桐生誕百年祭の行事が催された。正確に言えば、碧梧桐は明治六年（一八七三）、虚子は翌七年の生れである。

虚子が亡くなったのは、昭和三十四年（一九五九）で、八十六歳であった。子規に始めて手紙を送って俳句の指導を乞い、虚子という号をつけてもらったのが、明治二十四年（一八九一）、十八歳の時だから、彼の俳句歴はほとんど七十年に及ぶと見てよい。近代俳句の創設の時期から、その歴史の始終を、見守りながら生きつづけて来たというのは、考えると驚くべき長さの俳生涯であった。

その間、虚子・碧梧桐と並称されながら、その後自身は、蛇笏・水巴の時代、秋桜子・誓子の時代、草田男・たかしの時代、波郷・楸邨の時代を送り迎え、そして彼の死後、今日の龍太（飯田）・澄雄（森）らの時代に到っているのである。しかもその長い世代交替のあいだ、虚子は虚子でありつづけ、その死後も、何か解きがたい謎を含んで俳人たちに働きかけている。この生命力は、考えてみると不可思議という外はない。

虚子と碧梧桐とは、何から何まで対蹠的な傾向を見せている。子規が「明治二十九年の俳句界」を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook